

<序論>

研究動機・研究目的・研究方法

ハンドボールは1チーム7名(CP6名、GK1名)のプレイヤーで構成され、2チームで競い合い、競技時間内により多くの得点をあげた方が勝者となる。チーム内で連携したプレーが機能するかにより勝敗が左右されるだろう。そこで、集団戦術を機能させるためには個人戦術に磨きかける必要があると考える。筆者はハンドボールを始めて12年目になるが、これまで多く関わってきたポジションは攻撃の要と言われるセンターである。どのように動けば味方を生かせるか、そして自らもシュートまで到達できるかを日々悩まされている。そこで、センタープレイヤーの動きに焦点を当て、個人戦術についての理解を深めていくことにする。

研究目的は、センタープレイヤーにおけるパス及びシュートの個人戦術の運動過程を類型化し、それぞれの運動構造を明らかにしていくことである。その方法は、マイネルの運動学における運動モルフォロジー的考察法を用いて、印象分析を行うものである。その際の映像は、全日本学生選手権大会(2005)に優勝した筑波大学男子ハンドボール部の全試合を使用し、K・M選手のプレーを観察対象とする。この映像を基にして典型的なプレーを類型化し、それぞれの運動構造の分析・考察を行うこととする。

<本論>

第1章 ハンドボール競技の構造特性

絶え間なく状況が変化し続けていく中で、戦術的な目標、課題、行為の実現のために、連続的な運動の組合せとして合目的な運動経過が常に用いられていく。そのために、技術の特性、個人戦術、集団戦術についての考察を行った。個人的戦術は、ゲーム状況を分析した後、状況に見合った行為目標を決定し、状況の効果的な解決をめざした行為プログラムを決定し、それを運動としてうまく実施するためのプレイヤーの措置のことである(シュティラー, G.1993)。様々な運動の組合せにより、個人戦術として行為になって現れる。実際のゲームで個人戦術を発揮するためには、グループ戦術やチーム戦術のような集団戦術が密に関わりをもつことになる。そして、これらは相手の妨害の下で実行されるので、多くの技術的・戦術的要素を非常に狭い空間で相互に結びつけることが重要になってくる。

第2章 ゲームの運動観察方法

ゲームの運動観察には運動モルフォロジー的考察法を用いる。この考察法は、運動を見て外から知覚するだけでなく、体験し中から知覚することにより補充・拡大されるため、自分自身の運動の自己知覚に基づく「自己観察」と他者の知覚に基づく「他者観察」によって印象分析(K,

マイネル,1981)を行うものである。実際に観察・分析していく際に、時空間的な展開形式、運動の大きさ、運動のスピードなど可視的で知覚できる質的な諸徴表を前景に立てる。そこで、K・マイネルの諸カテゴリーの中から「運動の局面構造」、「運動リズム」、「運動の先取り」、「運動の正確さ」の4つのカテゴリーを用いて運動構造を理解していく。

第3章 ゲームにおける個人戦術の類型化

5試合を通してパス及びシュートの個人戦術の典型的なプレーに焦点を定め、6つの事例が典型例として挙げられた。パス運動を3類型(事例1:1人抜いてからのリストスロー、事例2:オープンスペースへのポストパス、事例3:ワングロスでリストスローからのブロック)、シュート運動を3類型(事例4:パスフェイントからのカットイン、事例5:突破フェイントからのジャンプシュート、事例6:パスアンドゴー)に類型化することができた。それらのプレーを観察していく中で、次のような5つの特性が見えてきた。

- ボールをリリースするまでパスかシュートかを瞬時に判断することが困難なプレーである。
- DFと対峙するとき、「運動リズム」の緩急に変化をつける。ゆっくりとした展開をDFに共感させ、即座にトップスピードに持ち込み、DFを惑わせる。
- 1度のOFにおける「運動の先取り」を行い、おおよその構想ができていく。特に他者の運動の先取りが行われているため、DFは後手に回る。
- 捕の終末局面と投の準備局面の局面融合がよく見られ、スムーズ且つ速くパス及びシュートに持ち込んでいる。
- 常に自分の間合いを保っているため、DFに捕まれずにプレーできる。この間合いのとり方はDFと対峙するときが大事になってくる。

<結論>

本研究では、個人戦術の中からパス及びシュートの運動過程を類型化し、その典型事例より次のような特性を捉えることができた。他者の「運動の先取り」を行い、DFからずれて位置取りや走り込みにより、相手を惑わせて自分が優位になるプレーをしている。そのときには、おおよそのOFの構想ができていく。また、「運動リズム」に緩急の差をつけることにより突破への足掛りとしている。そして、自分の間合いを保ってプレーすることで、ゼロステップやワンドリブルを効果的に使い、DFを共感させた上で欺くことが大事である。

考察した個人戦術は、集団戦術の中で効果的に行われている個人戦術であるといえる。いかなる局面であっても念頭に置くことは数的に有利な状況を作り出すことである。そこで、膨大な選択肢から次の運動を選択するのは、これまでの経験が影響してくる。そこで最良の選択肢を見極めるためには、一回性の運動の本質に目を向け、見抜くことが課題になってくる。自分の運動経験を活かし、他者観察における自己観察化を行い、自分のコツにすることが重要である。

今後の展開として研究対象者の過去の運動経験を追求していくことがより深い研究につながっていくと考える。そして観察の幅を個人から集団へと広げていくことも必要になってくるだろう。

(引用・参考文献省略)